

笹原 2

笹原遺跡群第2次発掘調査概要

福岡市埋蔵文化財調査報告書第642集

2000

福岡市教育委員会

序

現在、福岡市はアジアの拠点都市を目指し、国際都市づくりを進めています。福岡市南部に広がる 笹原遺跡群は、かつてこの地域に展開していた「奴国」の一部であり、国指定史跡である春日市須玖・岡本遺跡から那珂・比恵遺跡群を結ぶルート上に位置しています。

今回報告する第2次調査地点では、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての集落と古代の溝が確認されました。また、本調査で出土した旧石器時代に属する石器は、当時の石器生産・流通の様相を明らかにする上でかぎりとして貴重な資料です。

本書が市民の皆様をはじめ、学術研究の場で活用されることを念願しております。また、調査から整理・報告まで、様々な御協力を賜りました畠田利秀様ならびに上村建設株式会社をはじめとする多くの方々に、心から謝意を表します。

平成12年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西 憲一郎

例　　言

1. 本書は、博多区諸岡5丁目20・23・24番における共同住宅建設に先立って、福岡市教育委員会が平成10年度（1998年度）に実施した笹原遺跡第2次調査の発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆・編集には本田浩二郎があたった。
3. 本書に使用した遺構実測図は本田・今村佳子・伊藤健太・坂本真一が作成した。
また、製図には本田・今村佳子があたった。
4. 本書の遺構実測図中に用いていて方位は、すべて磁北である。
5. 本書に使用した遺物実測図は本田・今村佳子が作成し、今村が製図した。
遺物実測図の縮尺は土器類を1/3に統一し、石器を1/1で統一した。
なお、石器についての実測・報告は吉留秀敏が担当した。
6. 検出した遺構については、調査時に検出順に通し番号を付した。
7. 本書で使用した写真は本田が撮影した。
8. 砂鉄の分析については大澤正己氏から玉稿を賜った。
9. 本調査に関わる記録・遺物類は報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理・公開される予定であるので、活用されたい。

本文目次

第一章　はじめに	1
第二章　発掘の記録	3
第三章　まとめ	15
付篇　笹原遺跡2次調査出土石器	16
SC-07出土砂鉄分析	18

第一章 はじめに

1. 調査にいたる経緯

平成10年2月6日、誉田利秀氏より福岡市教育委員会埋蔵文化財課に対して、博多区諸岡5丁目20番、23番、24番内における共同住宅建設予定地内に関しての埋蔵文化財事前審査願が提出された。申請地は周知の遺跡である佐原遺跡の北端部に位置しており、現状で周辺よりも50cm程度高い宅地となっている。埋蔵文化財課では平成10年2月18日に第1次試掘調査、既存建物の解体後の平成10年9月14日に第2次試掘調査を行った。その結果、現地表面から20~30cm程度掘り下げた鳥居ローム層上面において占墳時代から古代にかけての溝、柱穴等の遺構と該期の遺物の存在を確認した。共同住宅建設に伴う基礎工事によって遺跡の破壊は免れないため、申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議を行い、工事によって止むを得ず破壊される部分については発掘調査を行い、記録保存を図ることとなった。発掘調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課がこれを行うこととなり、平成10年10月21日に着手し、同年11月30日に終了した。

2. 調査体制

調査委託	誉田 利秀				
調査主体	福岡市教育委員会	教育長		町田 英俊（前任）	
				西 竜一郎（現任）	
	同	埋蔵文化財課 課長		柳田 純孝（前任）	
	同			山崎 純男（現任）	
	同		第2係長	山口 篤治（前任）	
	同			力武 卓治（現任）	
調査庶務	同	文化財整備課		谷口 真由美	
調査担当	同	埋蔵文化財課	事前審査係	星山 洋（試掘調査）	
			第2係	本田 浩二郎（本調査）	

調査作業	伊藤 健太	岩本 三重子	大賀 規矩雄	人谷 政道	越智 信孝
	木原 保生	近藤 澄江	坂本 真一	澄川 アキヨ	玉田 重人
	富永 利幸	中村 フミ子	西山 仔子	野田 淳	羽間 正春
	林田 和子	平井 武夫	藤野 トシ子	広田 熊雄	村田 敬子
	水田 ミヨ子	播磨 千恵子			
整理作業	有島 美江	野副 けいこ	鳥飼 悅子	室 以佐子	

遺跡調査番号	9841	遺跡略号	S S B 2
調査地地番	博多区諸岡5丁目20、23、24番	分布地図番号	25 井尻
開発面積	1403m ²	調査面積	654m ²
調査期間	1998年10月21日~1998年11月30日		

3. 遺跡の立地と環境

玄界灘に面して広がる福岡平野部は、博多湾に流入する数本の中小河川と、三郡・背振山系から派生した低丘陵が入り組んで形成された小平野が東西方向に連なって構成される。東から糟屋平野・福岡平野・早良平野の順と並ぶ。福岡平野は主に那珂川・御笠川両河川の沖積作用によって形成され、博多湾に向かって開く逆三角形状の地形をなす。福岡平野の東西は標高50~80mの低丘陵によって他平野と区別されている。笹原遺跡群は福岡平野の東南端部に位置しており、周辺は春日市須玖間本遺跡から井尻遺跡、那珂・比恵遺跡群へと続く遺跡密集地帯が広がる。笹原遺跡群の北西に近接する諸岡遺跡は、現在までに17次までの調査が行われており、旧石器時代から近世にかけての遺物・遺構群が検出されている。特に古墳時代には小形墳墓群とそれに伴う集落が発見されており周辺に展開していたことが想定される。また、西側に接して分布する三筑遺跡群では、弥生・古墳時代から鎌倉時代の水田遺構が検出されている。特に古墳時代の水田は遺存状態が良好で、水路に設けられた複数の井堰の位置関係から小区画水田の水かかりを具体的に把握することができる。

笹原遺跡群内では、現在3次調査までが行われている。第1次調査は笹原遺跡群内の南西端部で行われ、古代の土坑墓群が検出されている。それらを営んだと考えられる集落は笹原遺跡内では現在のところ検出されていない。



Fig. 1 遺跡位置図 (縮尺 1/8,000)

第二章 発掘の記録

1. 調査の概要

笠原遺跡群は背振山系から流れ出る那珂川と、牛頭・四王寺山地から流れ出る御笠川とによって形成された福岡平野の那珂川下流右岸に位置しており、台地に挟まれた谷底平野上に立地している。その名の如くおり、もとは笠の生い茂る原野であったと言われている。周辺には諸岡遺跡群・三筑遺跡群・井尻B遺跡群などの遺跡群が分布している。諸岡遺跡群は笠原遺跡群の北西約500mに位置しており、1次調査では細石刃文化期の包含層、弥生時代から古墳時代前期にかけての集落・墓地群が検出されている。今回報告を行う笠原遺跡第2次調査地点は、遺跡群の北端部に位置し、位置的にも諸岡遺跡に近接しており、遺構の内容・年代も類似している。

調査地点の現状は宅地であり、現地表面の標高は11.5m前後を測る。これより20~30cmほど下の鳥栖ローム層まで重機によって掘削したのち調査に着手した。調査は申請面積1403m²のうち、開発によって破壊される654m²について行った。遺構面は調査区内部が、過去の開発工事によって大きく削平されており遺構の遺存は浅かったが、調査区内西側縁辺部は遺構が良好に遺存していた。検出した遺構は弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての方形堅穴住居8軒、掘立柱建物1棟、古代から中世の溝2条である。遺物は旧石器時代に属する石器1点、弥生時代前期の土器・石器、古墳時代前期の土器、古代から中世にかけての土器がコンテナケース4箱分が出土した。



Fig. 2 調査区位置図 (縮尺 1/1,000)

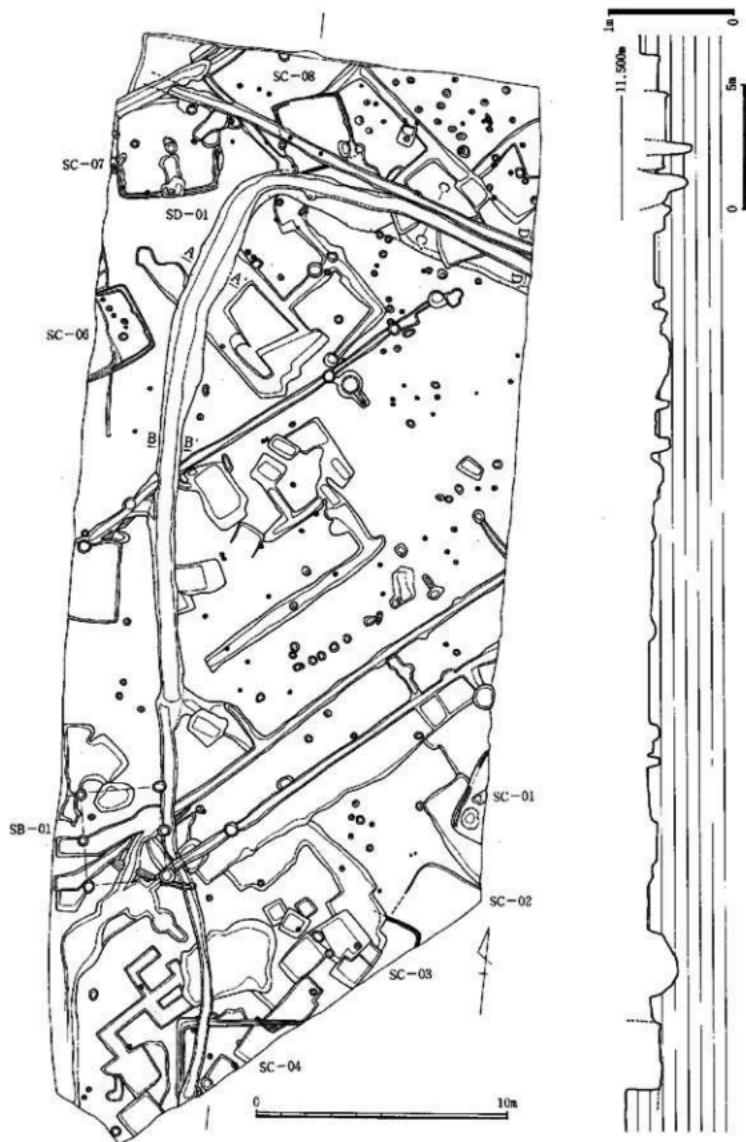
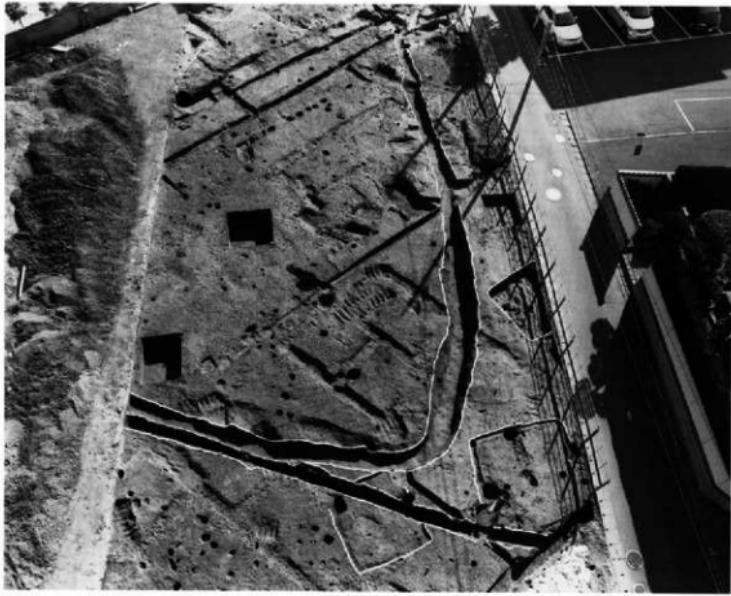


Fig. 3 造構配置図（縮尺 1/200）・佐原遺跡第2次調査地点断面図（縮尺 縦 1/40・横 1/200）



Ph. 1 調査区全景（北から）



Ph. 2 調査区全景北部分（北から）

2. 遺構と遺物

(一) 壓穴住居跡

調査区内において8軒を検出した。いずれの住居跡も調査区縁辺部での検出ではあるが、著しく削平を受けており残存は浅く、正確な規模を計測できたものはわざがに2軒のみである。調査区中央部から東側にかけては激しく削平されており、住居跡は壁溝すら確認されなかった。本来ならば調査区中央部付近にも数軒の壓穴住居が営まれていたと考えられる。

SC-01 (Fig-4)

調査区南東端部にて検出した方形住居跡で、南西部隅と西側壁溝のみ調査した。覆土はロームの混入した暗褐色土である。残りは調査区外へとのびる。削平が激しく検出面からの深さ10cmのみが残存する。現状では壁溝は西壁のみに見られ、貼床も削平されており、掘削痕と思われる土坑のみ南西隅で検出された。この他には床面では建物に伴うと考えられる柱穴等は検出されなかった。一部のみの調査であり、平面形が方形であること以外は確認できない。遺物の出土はなく時期も判定しがたい。

SC-02 (Fig-5)

調査区南東部隅において検出した方形住居跡で、北側と西側の壁溝の一部のみ調査した。南側はSC-03に切られ、東側は調査区外へとのびる。上部はほぼ削平され壁溝の底部のみ遺存している状況である。壁溝の検出面からの深さは5cmを測る。覆土はロームの混入した暗褐色土である。SC-01とは平行に並ぶように建てられる。遺物の出土はなく、時期の判定はしがたいが、SC-01と同時期か近接する時期の壓穴住居跡と考えられる。

以上2軒の住居跡の遺存状況から調査区東側では50cm以上の削平を受けていることが伺えよう。

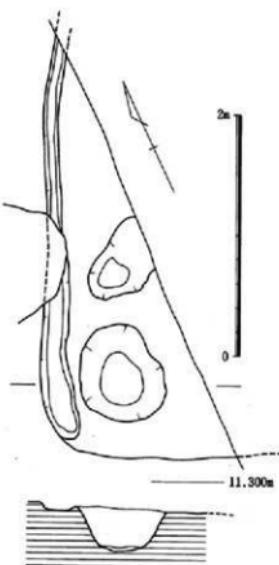


Fig. 4 SC-01 実測図 (縮尺 1/40)



Ph. 3 SC-01 検出状況（南から）



Ph. 4 SC-02 検出状況（北から）

SC-03 (Fig-6)

調査区南東部隅にて検出した方形住居跡である。北側と東側の壁溝の一部を調査した。西側は攪乱によって失われ、南側は調査区外にのびる。この住居跡も壁溝を残してほとんどが削平されており、壁溝の一部が検出面から深さ10cmほど残存しているだけである。覆土はロームの混入する暗褐色土で、遺物の出土はなかった。床面上には建物に伴う柱穴を検出することはできなかったが、西側の攪乱内に柱穴の可能性がある土坑を検出した。床面からの深さは復元で37cmを測る。この土坑内から高坏が出土した。

Fig-7 に出土遺物を示す。

1は高坏である。口径19.8cm、底径11.8cm、器高18.8cmを測る。脚部にスカシ孔が3つ焼成以前に穿孔されている。器面調整にはハケ目調整を施す。

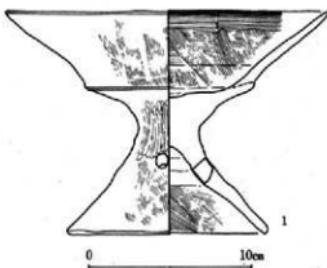


Fig. 7 SC-03 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

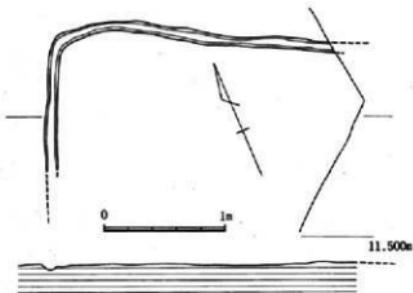


Fig. 5 SC-02 実測図 (縮尺 1/40)

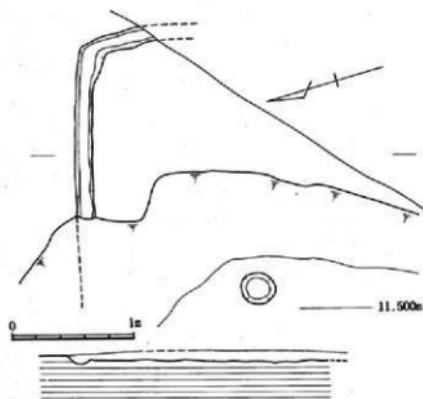
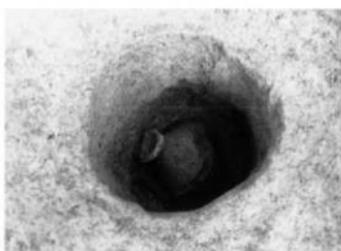


Fig. 6 SC-03 実測図 (縮尺 1/40)



Ph. 5 SC-03 検出状況 (西から)



Ph. 6 SC-03 遺物出土状況 (西から)

SC-04 (Fig-8)

調査区南側で検出した方形住居跡で、北側と西側の壁のみ確認できたが、南東側の大半は調査区外にのびるため、正確な平面形は不明である。覆土はロームが混入する暗褐色土である。床面は検出面から深さ10~15cmを測る。貼床は5~10cmの厚さで施されており、床面上で柱穴を一つ検出した。

Fig-9に出土遺物を示す。

1は古式土器の二重口縁壺の口縁部片である。復元口径は19.8cmを測る。口縁部端部はナデによって面取りする。器面は摩滅が激しく調整は観察できないが、わずかに横位のナデ調整が確認できる。色調は淡赤褐色を呈する。2・3は高坏の脚部片である。2は坏底部から脚部上半のみが残存する。3も坏底部から脚部のみが残存する。遺存状態はあまり良くない。

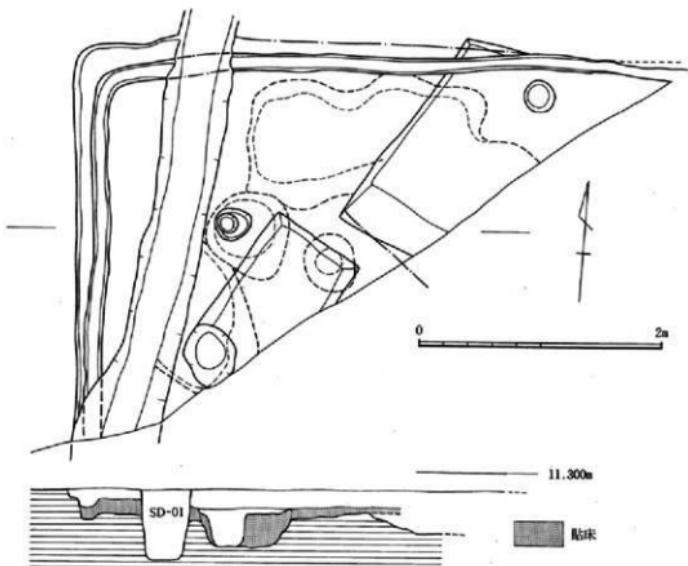
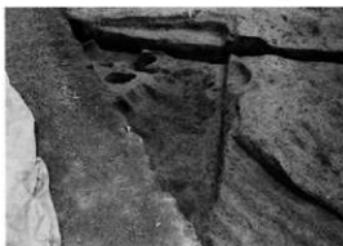


Fig. 8 SC-04 実測図 (縮尺 1/40)



Ph. 7 SC-04 検出状況 (東から)



Ph. 8 SC-04 検出状況 (西から)

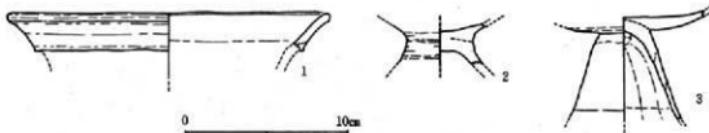


Fig. 9 SC-04出土遺物実測図 (縮尺1/3)

SC-06 (Fig. 10)

調査区北西部で検出した方形住跡である。西側は調査区外にのびる。東側で長さ2.85mを測る。東側に盛り土のベット状造構をもち、床面では柱穴は検出されなかった。検出面からの深さは40cmを測る。

Fig. 11に出土遺物を示す。

1・2は甌の口縁部片である。復元口径は15.0cm、16.0cmを測る。1は胴部に斜位のタキ調整を施す。内面には範磨きを施す。3・4は塊である。3は復元口径18.4cmを測り、外器面には斜位の刷毛目調整を施す胴部下半部には煤が付着する。5は小形甌の底部片である。底部には穿孔を焼成以前に施す。外面は刷毛目調整、内面には指ナデ調整を施す。6・7は高坏の脚部片である。復元底径は15.4cm、15.2cmを測る。6は内外器面とともに丁寧なヘラ磨き調整を施す。7は摩滅が激しく調整は観察できない。

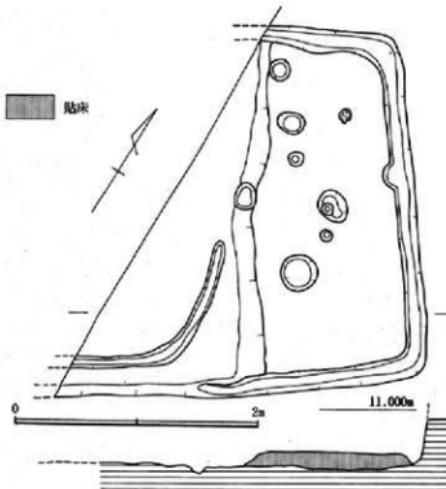


Fig. 10 SC-06実測図 (縮尺1/40)



Ph. 9 SC-06検出状況 (北から)



Ph. 10 SC-06完掘状況 (北から)

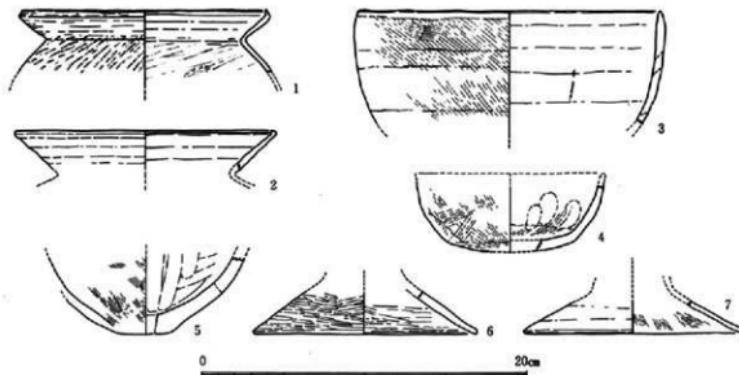


Fig. 11 SC-06出土遺物実測図 (縮尺1/3)

SC-07 (Fig-12)

調査区北西端部で検出したほぼ正方形の住居跡である。北側の周縁を擾乱などによって失うが、現状で3.9m×3.9mを測る。上部はほぼ削平されており壁溝と柱穴のみ検出した。壁溝はほぼ全周するが5cmほどしか残存していないかった。2本柱の上部構造をもつ住居で、柱穴は検出面から20cmの深さを測る。床面上で土坑2基を検出し、埋土を水洗・磁選したところ砂鉄が採集された。詳細については大澤正己氏の玉稿を参照されたい。南側の土坑は検出面から深さ60cmを測り、埋土は上層に黒褐色土、下層に炭化物を含む暗褐色土が堆積する。二つの土坑を結ぶ浅い窪みにはしまりのある暗褐色土が堆積しており、若干の焼土を含む。中央の土坑の埋土は黒褐色土で焼土を含む。この土坑の底面は被熱のため赤褐色に硬化する。被熱が激しいのは南側の土坑に面した部分のみで、北側より送風していたことが想定される。住居内で行われた製鉄作業関連の工房遺構と考えられる。

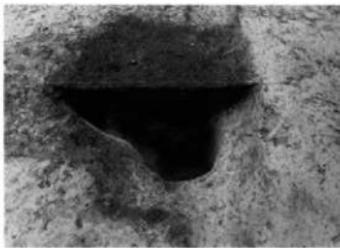
Fig-13に出土遺物を示す。

1は高杯の壊部片である。復元口径は24.8cmを測り、残存高は5.6cmを測る。

2は壺の口縁部片である。復元口径は14.8cmを測り、色調はにぶい褐色を呈する。



Ph.11 SC-07検出状況 (北から)



Ph.12 SC-07南側土坑断面 (西から)

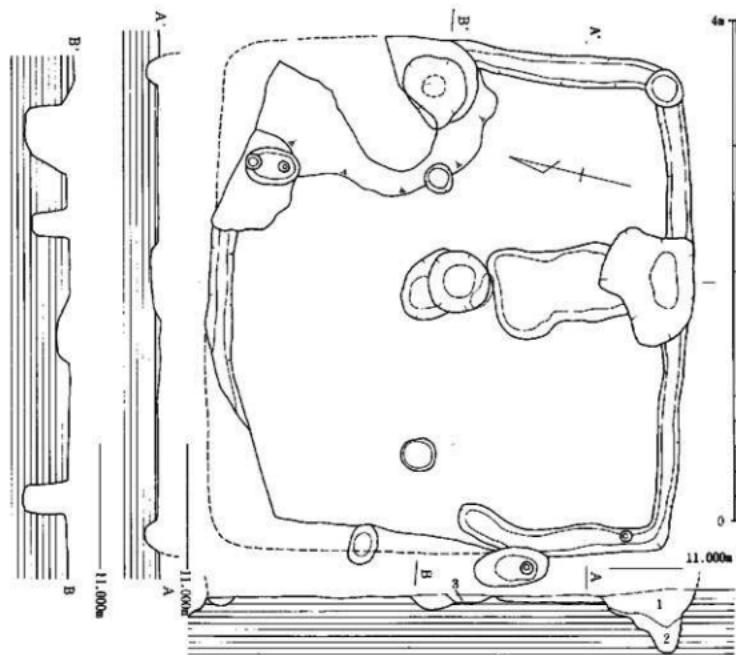


Fig. 12 SC-07 実測図 (縮尺 1/40)

SC-07 1番：黒褐色土 2番：暗褐色土 しまりがなく炭化物・ロームブロックを含む

3番：黒色土 しまりがあり焼上が混入する

3は塊である。復元口径は8.2cmを測り、色調は赤褐色を呈する。器面調整は摩滅しており観察できない。4は高壺の脚部片である。復元底径は18.4cmを測る。器面調整には刷毛目調整を施す。

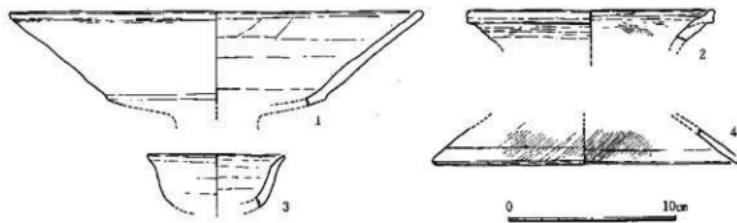


Fig. 13 SC-07 出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

S C - 0 8 (Fig-14)

調査区北側で検出した方形住居跡である。南端隅と中央部の一部を他の遺構に切られ失うが、現状で3.0m×2.8mを測る。上部はほぼ削平され壁溝と床面の一部が残存する。覆土は暗褐色土で、ロームのブロックが混入する。検出面からの深さは10cm程度を測る。床面上では柱穴、炉等は検出されなかつたが、高坏・塊などが西側の壁近くで検出された。

Fig-15に出土遺物を示す。

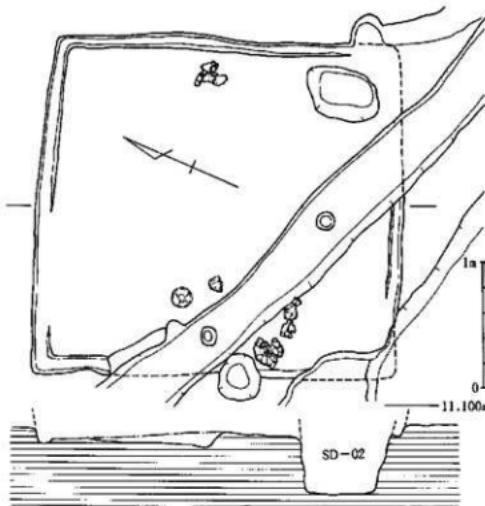


Fig. 14 SC-08 実測図 (縮尺 1/40)

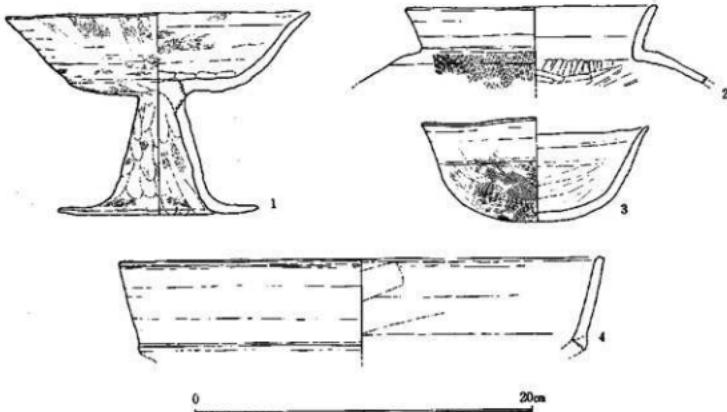
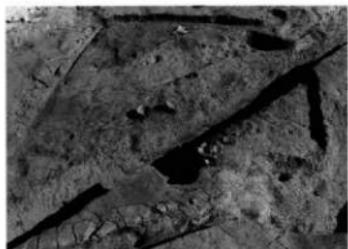


Fig. 15 SC-08出土遺物実測図（縮尺1/3）



Ph.13 SC-08 検出状況（西から）



Ph.14 SC-08 遺物検出状況（西から）

SB-01 (Fig.16)

調査区南西部で検出した掘立柱建物跡である。東側の柱穴列はSD-01に切られ、西側は既存建物の基礎に搅乱される。桁行2間、梁間1間の建物で、桁間全長3.6~3.7m、梁間全長3.14mを測る。柱穴はほぼ円形で直径40~60cm、検出面からの深さは40~50cmを測る。埋土はしまりのある黒色土で、柱痕跡は確認されなかった。桁行の方向はN-10°-Wをとる。柱穴の埋土からは遺物の出土ではなく、時期は比定しがたい。笠原遺跡内での集落跡の検出は本調査が初めてであり、今後事例の増加を待たなければならないが、本調査地点に近接する諸岡遺跡検出の集落が広範囲に展開しているとすれば、本調査地点の集落もその一画として捉えることができよう。

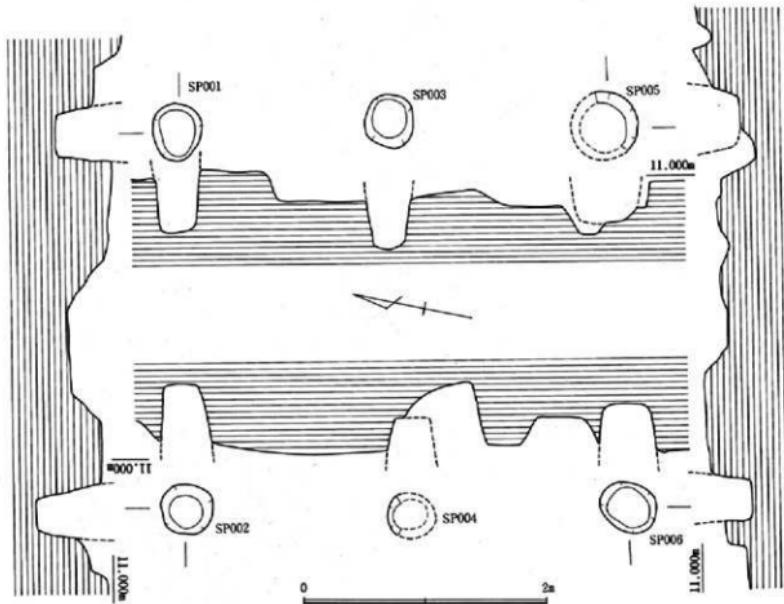


Fig.16 SB-01 実測図 (縮尺1/40)

(二) 溝

調査区内において2条の溝遺構を検出した。両溝ともに調査区を縦断・横断するように掘削されており、屋敷地などの区画溝であったことが考えられる。

SD-01 (Fig-3・17)

調査区を縦断するように南北方向にのびる溝である。調査区北側で東側にはほぼ直角に曲がる。断面は基本的に箱堀で、土層断面の観察から掘り直しが行われたことが分かる。上面での幅が最大で1.5m、底面で幅60cm、検出面からの深さ75cmを測る。

SD-02 (Fig-3・17)

調査区北側で検出されたほぼ東西方向にのびる溝である。SD-01に切られるが、断面はU字形で、上面での幅は60cm、底面で30cm、検出面からの深さは60cmを測る。

これらの溝からは少數ではあるが遺物が出土したが、時期を比定できるものとしては瓦器焼片が2点のみしかない。旧石器時代の細石核母核 (Fig-19-1) が出土したが、SD-01を掘削すると同時に鳥栖ローム層に包含されていたものを掘り起こし、埋土に混入したと思われる。調査区周辺では中世の段階で大きな地形変化が行われていることが最近の調査から分かっており、これらの区画溝も古



Ph.15 SB-01検出状況（北から）

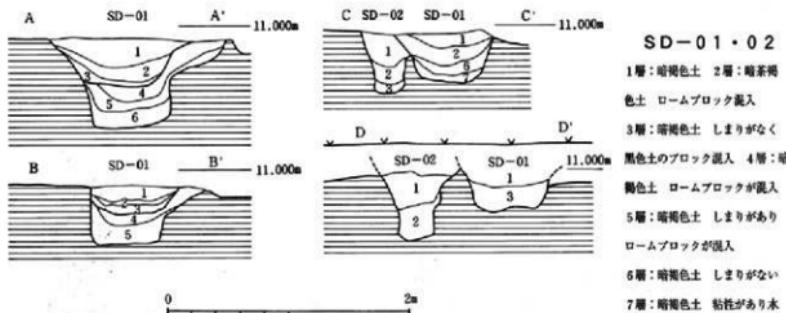


Fig.17 SD-01・02土層断面図（縮尺1/40）



Ph.16 SD-01.02検出状況(東から)



Ph.17 SD-01土層断面（南から）

代末から中世初期段階で掘削・使用されたものと考えられる。本調査地点にもっとも近い諸岡遺跡群第9次調査（G地点）においても中世期に属する掘立柱建物群・柵列・溝などが検出されており、周辺では諸岡居館跡が調査され、長期間にわたり生活空間として利用され続けていたことが想定される。

その他の出土遺物（Fig-18）

1はSD-01より出土した瓦器塊片である。内外面ともに丁寧な鏡磨きが施されており器面は銀化する。2はSD-02より出土した瓦器塊片である。高台径は4.6cmを測る。色調は灰褐色から黒褐色を呈する。3・4は弥生時代前期の甕片である。どちらも刻日突帯文土器の突帯部片であるが、細片であり遺存状態もわるい。この時期の遺物としては鉢片（Fig-19-3）も出土している。

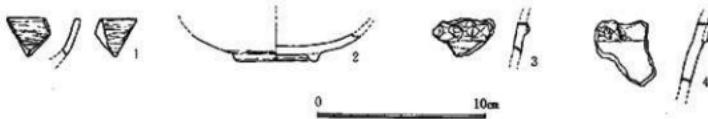


Fig. 18 その他の出土遺物実測図（縮尺1/3）

第3章 まとめ

以上、簡単ではあるが範原遺跡群第2次調査の概要について述べてきた。最後に簡単なまとめを行いたい。本調査地点での遺構の初現は古墳時代初頭の段階ではあるが、後期旧石器時代から生活領域として利用されていたことは出土遺物から推測される。次に活動の痕跡が認められるのは弥生時代前期の段階である。本調査地点からは数点の遺物の出土しか確認できなかったが、隣接する諸岡遺跡群内では該期の遺構も検出されており、付近一帯に遺構は展開するものと考えられる。

古墳時代初頭の段階では堅穴住居数軒から構成される集落が営まれており、諸岡遺跡群内で検出された該期の集落と一連のものと考えられよう。本調査地点で検出されたSC-07住居内の土坑からは砂鉄が出土し製鉄関連遺構と考えられたが、検出された砂鉄の分析結果からは、被熱の痕跡が認められず、製鉄作業に用いられたものであるという直接的な資料とはなり得なかった。しかしながら、土坑内に焼土共に堆積する状況から自然に堆積していたものではなく、人為的に集積されたものであることは明らかであり、製鉄作業の一役場における廃棄物として捉えることができよう。弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての製鉄活動については明らかにならない部分が多く、今後の調査事例の増加と詳細の究明に期待したい。

古代宋から中世初期段階では区画溝と考えられる溝二条のみが検出され、これに伴う遺構の検出はなかった。本調査地点は諸岡川右岸の微高地に位置しており、これらの溝はこの微高地縁辺を巡るように掘削されたものであろう。調査区内での検出は一部分のみで、その性格と規模は推定の域を出ないが、周辺の調査からも該期に遺構群が展開していたことは明らかにされており、その全容の究明が急務とされる。今後行われるであろう周辺の調査に期待したい。

笹原遺跡 2 次調査出土石器

1、出土石器の概要

笹原遺跡では 7 点の剥片石器類が検出された。出土遺構は SD 01 から 6 点、SD 02 から 1 点である。石材はすべて黒曜石製である。その器種構成は、細石核母岩（コアブランク）関連品 1 点、石鏃 1 点、二次調整ある剥片 1 点、剥片（碎片）4 点である。

以下では剥片（碎片）以外の 3 点について報告する。なお、未報告の剥片（碎片）はすべて剥離面の風化（バティナ）は少なく、剥離が自然面打面や綫長剝片剥離を意図したものがあることが注意される。

2、主要石器の報告 (Fig. 19)

1 は細石核母核と考えられる資料である。幅 1.5cm、長さ 2.9cm、厚さ 1.2cm、重さ 4.16g を測る。背面には自然面が残り、平滑な状況から肉眼では佐賀県伊万里市腰岳産出の黒曜石に類似している。なお、本資料はほかの出土資料と比較すると著しく剥離面の風化が進んでおり、異なる時期であることを伺わせる。また、各所に新しいキズが加えられている。発掘以前に本来の包含位置を離れ、二次的な移動があったと考えられる。腹面の主要剥離面は大きく幅広の不定形剥片を素材としていると見られた。石核調整は多くが主要剥離面側から施されているが、左側辺に背面からの直角に近い調整が施される。調整は周囲から全体としてレンズ状に施されているが、中央の自然面を除去できていない。石核調整後、石核右方向からの打撃により分割されている。

本資料は石核整形後の打面設定に伴うものと見られる。本資料自体が石核素材となりうるものか、あるいは打面形成時の第一打目のファッショットの剥片、いわゆるファーストフレイクであるのかの断定は困難であるが、想定される本來のコアブランクの形状がより大きなものであると考えられることから、後者の可能性が高いとみられる。

いずれにしても本資料は、楔形細石刃核製作にともなうものであり、打面設定がブランクの主軸に沿って行われていることから見ると西北九州地域に分布する「福井型細石刃核」に関連するものと判断される。したがってその時期は縄文時代草創期に位置づけられよう。

2 は石鏃である。先端部と片方の脚端を欠損している。現状で長さ 1.9cm、幅 1.8cm、厚さ 0.4cm、重さ 0.91g を測る。復元推定は長さ 2.8cm、幅 2.0cm と考えた。剥離面の風化はやや進んでいるが、資料 1 ほどではない。また、ほかの剥片（碎片）より風化は進んでいる。石材はわずかに透明感のある黒曜石であり、西北九州産出とみられるが、産地は明確に出来ない。石鏃の調整剥離は全周から丁寧に施され、素材剥片の剥離面は残されていない。脚部や軸部の横断面形は凸レンズ状をなしている。先端部並びに脚端の欠損は古く、先端部は折れを生じている。これらは使用時の欠損の可能性もある。

本石鏃は縄文時代早期の押型文土器文化にともなう「鉢形鏃」である。ただし、脚部は逆 U 字形に開き、断面形もやや薄く仕上げられているなど、脚部が逆 U 字形に開く古段階のものではなく、鉢形鏃のなかでもやや新しい段階に位置づけられるものである。

3 は二次調整ある剥片である。幅 2.6cm、長さ 2.5cm、厚さ 0.5cm、重さ 2.34g を測る。剥離面の風化は少なく新鮮なガラス質がみられる。石材は漆黒色の黒曜石であり、自然面は比較的平滑である。腰岳産出黒曜石に類似するが明確でない。素材剥片は自然面打面であり、背面には同一打面からの剥離 2 面、左側から 2 面、右側から 1 面、下方から 1 面の剥離が認められる。いずれの剥離面も解放剥離であり、切り合いでみた剥離順も左右、下方にばらついている。こうした点から見て、本剥片は石核整形や定形剥片剥離にともなう調整剥片というより、石核の周囲から本来不定形の剥片を隨時剥

離するような剥片であったと考えられよう。なお、二次調整は剥片の下縁部に沿って剥片形状を損なわずに整形している。したがって、刃部は著しい凹凸をなし、二カ所に尖頭状の突出部がある。

この資料については、今回凹化していない剥片（碎片）も石材、剥離風化面が類似し同一の石器群と考えられる。なお、この資料については不定型な二次調整ある剥片であり、ほかに関連する定形石器がないために明らかにし難い。ただし、周辺の板付遺跡などの成果から見るとこうした石材の利用や剥片剥離の状況からみて、おおまかであるが縄文時代後期末から弥生時代前期前半の範疇に位置つけられるものと考えられる。

3. 石器からみた遺跡の性格

本遺跡から出土した石器はわずかである。また、その時期も少なくとも三時期に区分された。前二期は縄文時代草創期と縄文早期であり、ほかは縄文時代後期末から弥生時代前期前半と推定した。後者については板付遺跡、諸岡遺跡を中心に展開する初期水田農耕集落などの展開が関連していると予測できる。以下、前二者について若干ふれておきたい。本遺跡は諸岡川左岸沿いの段丘縁辺に位置している。周辺での遺跡の分布は板付遺跡、諸岡遺跡、那珂遺跡などでナイフ形石器段階から網石器段階の資料、板付遺跡では押壺甌上器段階の土器や石器類が確認されている。これらの遺跡では台地上を除くと多くの資料が水路や耕作土に混入しており、縄文時代晚期以降の開発によって現位置を遊離したものと考えられている。近年井相田D遺跡2次調査において御笠川左岸の縄文時代埋没林が確認された。埋没時期は出土遺物やC14年代から縄文海進以前とみられる。丘陵を挟み同じ条件である諸岡川沿いでは現在は完新世堆積物で埋没し、段丘崖などは明確でない。しかし、縄文海進以前には段丘面が埋没しておらず、その縁辺は狩猟採集活動の最適地として利用されていたと推定される。本遺跡出土の資料は僅かではあるが、そのことを物語る遺物と考えられる。

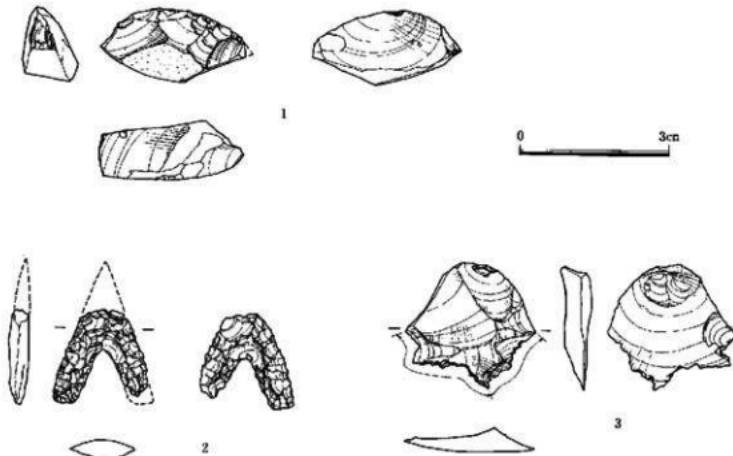


Fig. 19 出土石器実測図（縮尺1/1）

笹原遺跡堅穴住居跡堆積砂鉄について

大澤正己

1. 概要

笹原遺跡の弥生時代終末期から古墳時代への移行期（3世紀中～後半）に比定されるSC-07堅穴住居跡の中央土坑と、南側土坑から採取（水洗・磁選）された砂鉄を調査して、次の点が明らかになった。

採取砂鉄は、糸島半島から福岡平野に広く賦存する酸性砂鉄と同等のもので、粒径0.1～0.4mmを測る磁鉄鉱（Magnetite: $Fe_3O_4 \cdot FeO$ ）と格子組織のチタン鉄鉱（Ilmenite: $FeO \cdot TiO_2$ ）の混在物である。

該品は、焼土粉末と共に製鉄との関連が注目されたが、検鏡により砂鉄粒子の被熱状態を精査した結果、全くその傾向はない、天然の堆積砂鉄に分類された。

2. 調査方法

2-1. 供試材

Table. 1 に砂鉄の履歴と調査項目を示す。

Table. 1

特号	試料	出土位置	推定年代	調査項目			
				マクロ組織	顕微鏡組織	蛍光X線分析	
FKO-1	砂鉄	9481 SSB2 SC-07 中央土坑内	弥生時代終末～古墳時代初期 (3世紀中～後半)	○	○	○	
FKO-2	+	9481 SSB2 SC-07 南側土坑内	-	○	○	○	

2-2. 調査項目

- (1) 肉眼観察、(2) マクロ組織（実体顕微鏡）、(3) 顕微鏡組織、(4) 蛍光X線分析
(2)(4)の項目は福岡市埋蔵文化財センターの設備を利用した。比佐陽一郎氏の協力による。

3. 調査結果

(1) FKO-1：砂鉄

① 肉眼観察：大小の粒子が混在し、角ばった傾向をもち、光沢を有する。色調は灰黒色で赤色焼土粒を僅かに交える。

② 顕微鏡組織：Photo. 2 の①～⑨に示す。①～⑦の白色粒子は、磁鉄鉱（Magnetite: $Fe_3O_4 \cdot FeO$ ）である。各粒子内に散在する茶黒点は包裹鉱物（輝石、角尖石、石英など）である。その量は少ない。また、⑧⑨は格子組織のチタン鉄鉱（Ilmenite: $FeO \cdot TiO_2$ ）であり、Mag・Ilmeniteの溶離組織である。これらの各粒子は、生砂鉄であって被熱の痕跡は一切認められない。砂鉄の被熱組織は、粒子内に黒色斑点が表われて粒子周縁が特に荒れる。その様な傾向は観察されなかった。

③ 蛍光X線分析：Table. 2 に示す。測定範囲が0.3mm²なので砂鉄粒子1個分の情報である。それも数字は絶対値としてではなく相対比較のために記載した。磁鉄鉱粒子とチタン鉄鉱ではチタン濃度が異なるのは顕微鏡組織で観察した通りである。

(2) FKO-2：砂鉄

FKO-1 と内容はほぼ近似するので紙面の都合もあり、文章は割愛する。

Table. 2 砂鉄粒子の蛍光X線分析 (wt%)

試料	化学組成	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	Fe_2O_3	SO_3	K_2O	CaO	TiO_2	V_2O_3	Cr_2O_3	MoO	Fe_2O_3	CaO	ZnO
FKO-1	磁鉄鉱	1.08	1.35	10.17	7.16	0.21	2.08	0.17	0.24	0.92	0.14	0.13	1.04	74.64	0.03	0.06
	チタン鉄鉱	1.58	1.85	7.85	3.85	0.08	0.77	0.13	0.02	8.18	0.60	0.08	1.20	73.76	0.05	-
FKO-2	磁鉄鉱															
	チタン鉄鉱	2.41	5.37	9.95	7.66	0.10	0.96	0.10	0.19	8.37	0.48	0.09	1.64	62.48	0.02	0.17

(上記分析値は絶対値としては採用できない。あくまで相対比較用である。)

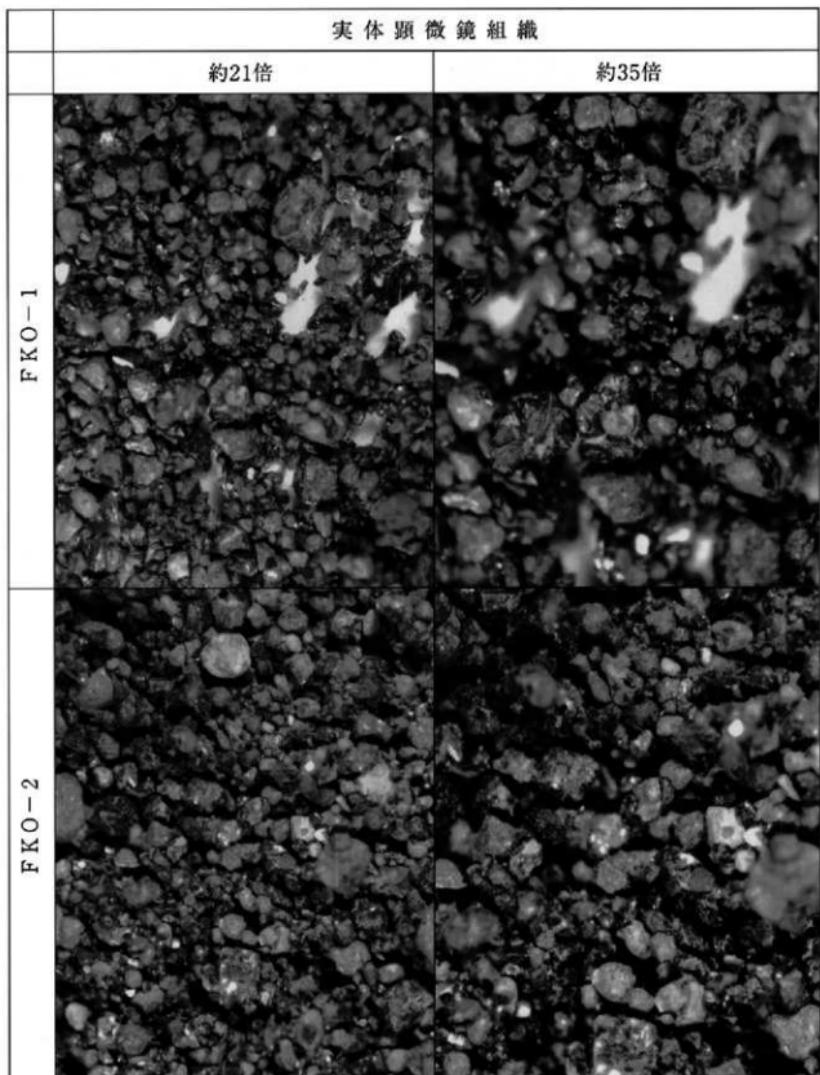


Photo. 1 砂鉄のマクロ組織

(1) FKO-1
砂 鉄
(1) ~ (8) $\times 100$, (9) $\times 400$
白色粒子：磁鉄鉱
(マグнетाइト : Magnetite)
(8)(9) 格子組織
チタン鉄鉱
イルミナイト $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$
外観写真 $\times 3$

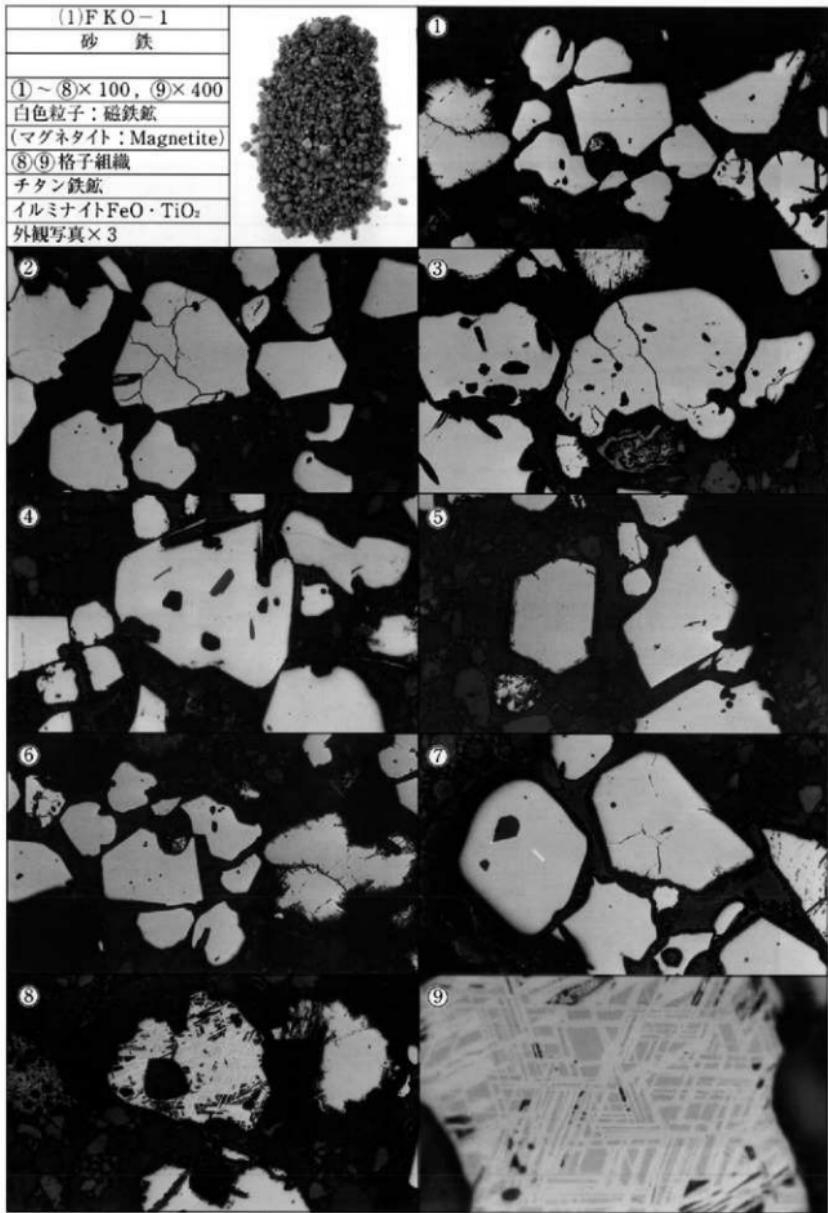


Photo. 2 砂鉄の顕微鏡組織

(2) F KO - 2
砂 鉄
① ~ ⑧) × 100, ⑨) × 400
白色粒子：磁鉄鉱
マグネタイト $\text{Fe}_3\text{O}_4 \cdot \text{FeO}$
⑧⑨ 格子組織
チタン鉄鉱
イルミナイト $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$
外観写真 × 3

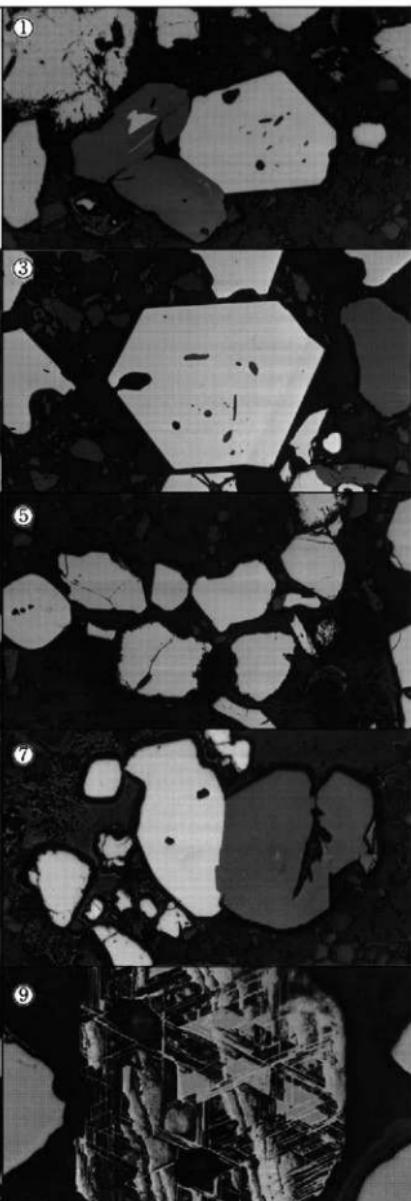


Photo. 3 砂鉄の顕微鏡組織



篠原遺跡2

-篠原遺跡第2次調査概要-

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第642集

2000年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会

印刷 (株)博多印刷